

古代の最先端技術、「鉄器づくり」

垣内遺跡は、弥生時代の「鉄器づくりのむら」だったことに、注目が集まっています。

当時の人々は、木や石・動物の骨や牙などを削ったり、磨いたりして道具に使ってきました。骨や牙は加工が大変で、石は重たく、木は折れてしまえば再生できません。しかし鉄の道具は、丈夫で軽い上に、切れ味が鋭い。鉄器（てつき）の登場は、当時の人に大きな驚きで受け入れられたことでしょう。

垣内遺跡の竪穴建物



鉄器を作るためには、鉄分を含んだ石や砂鉄を高温で溶かし、不純物を取り除く作業＝製鉄（せいてつ）が必要ですが、弥生時代の日本では本格的な製鉄は行われず、鉄の塊を海外から手に入れていました。わが国では手に入れた塊を高温でやわらかくして切り分け、形を整えて道具を作ったと考えられています。

垣内遺跡の竪穴建物の多くは、床面で高い温度の火をたいた痕＝炉跡（ろあと）がありました。また加工に使われた鉄床石（かなとこいし）や砥石（といし）が見つかり、鉄器を作っていた工房跡と考えられています。工房跡の建物がたくさん見つかったことから、鉄器づくりの工場であったとも考えられています。

調査の状況や出土した遺物は、淡路市教育委員会が整理・分析を行っています。垣内遺跡に暮らした人々の様子について、明らかになることでしょう。

また当時の日本人は、多くが技術を知らなかったと考えられ、~~調査研究がらジ遺跡で鉄器づくり~~に携わったひとがどこから来たのか？ また材料をどうやって手に入れたのか？ そして作られた道具はどこで・何のために使われたのか？ たいへん興味のある問題です。

こうした問題について、学術的な調査・研究プロジェクトを立ち上げており、兵庫県立考古博物館と淡路市、そして研究者の方々が共同で垣内遺跡の謎を解くために、取り組んでいます。

